

タブロイド地域紙「市民プレス」第68号(2015/4/5発行)の電子版として再編集しました。電子書籍専用のアプリケーション等でお読み下さい。またご利用の環境によっては、電子書籍の閲覧ができない場合がございます。

目次

-PAGE 2	足利政権の確立	その二	將軍義満から義持、義教の時代へ
			義満は北山文化を開花させて 勘合貿易を開始する
-PAGE 9	第四代將軍は義持に		
-PAGE 15	上杉家のルーツを辿る	-PAGE 20	関東管領上杉氏の系譜
-PAGE 21	年表：足利政権の確立(一)	(応永2年・1395～応永31年・1494)	
-PAGE 23	年表：足利政権の確立(二)	(応永32年・1495～享徳3年・1494)	
-PAGE 28	次の將軍は籤引きで		
-PAGE 32	歴代の足利將軍と公方	-PAGE 37	將軍・義教の後継は・・・



足利政権の確立 その二  
將軍義満から義持、義教の時代へ

義満は北山文化を開花させて

勘合貿易を開始する

明に使者を遣わす

義満は中国大陸の明朝に憧憬を抱き、応安七年(1374)、明の洪武帝に対して進貢(貢物を捧げること)の使者を遣わした。しかし、当時の明朝では、太宰府で活動していた懐良親王(南朝)を、日本国唯一、正規に交流する相手として認めていた。そのため義満は、その臣下と位置づけられ、交渉は実らなかった。

ふたたび使者を送る

康暦二年(1380)にも「日本国征夷將軍源義満」の名義で交渉を試みた。だが明朝は、周辺国の君主が皇帝に貢物を捧げ、これに対して皇帝側が恩賜を与えるという「朝貢形式」

を掲げていたので、義満の入貢（貢物を受け入れること）は、またも拒絶された。

その後、応永元年（1394）、義満は太政大臣を辞して出家し、天皇の臣下ではないという自由の立場となる。そこで、「日本国准三后源道義」の名義を使用して、応永八年（1401）、博多の商人肥富（こいつみ・こいずみ）と僧の祖阿（そあ）を使節として明に派遣する。

懐良親王の勢力はすでに没落していたので、明の二代皇帝の建文帝は、ようやく義満を日本国王に冊封（名目的な君臣の関係に）した。同時に明の大統曆が与えられて、両国国交は正式に樹立された。

### 明国に異変が起こる

ところが、返礼の使者を送る前に、明朝では、応永九年（1402）、「靖難の変」が勃発して、皇帝は建文帝から永楽帝に変わる。そこで源道義の使者が入貢し、永楽帝は、義満を日本国王に冊封した。

### 朝貢貿易に対して批判も

遣唐使の廃止以来、独自の政策を採っていた公家社会では、明皇帝の臣下となる朝貢貿易に対して不満や批判もあったが、義満の権勢の前では公の発言ができず、日記などに記すのみだった。

### 『勘合貿易』が始まって

応永十一年（1404）に、日本国王が明の皇帝に朝貢する形式で貿易が始まる。密貿易とは異なり、正規の貿易であることを証するため、明の皇帝から「勘合符」（証明書）が与えられた。割り印をそれぞれ持ち、その印が符合することによって判断した。

勘合貿易は、以後百四十年間も続き、銅・硫黄・刀剣・扇などが輸出され、銅銭・生糸・絹織物などが輸入された。

### 倭寇に対して義満は・・・

明が建国されたころ（1368年、明朝の洪武元年）、朝鮮半島や中国、大陸の沿岸を襲い、食料を奪って人身の略奪を行う海賊が活動していた。主に日本人だが、一部は高麗人であり、また中国人だった。倭寇（倭国は日本のこと）と呼ばれ、明朝からは厳しい目が注がれていた。義満は、明から要請されて倭寇を鎮圧した。

### 「北山文化」が花開く

義満は、応永四年（1397）、西園寺家から京都北山の「北山弟」を譲り受け、舍利殿の金閣を中心とする山荘（「北山第」または「北山殿」）を造営した。応永六年の春以降、義満はこの山荘に移り住み、活動の拠点とした。

## 鹿苑寺は・・・

北山山荘は義満の死後に寺院となり、寺の名称は開基した義満の法号・鹿苑院殿に因む。現在は、臨済宗相国寺派の寺として、京都市北区に在り、相国寺の山外塔頭寺院となっている。

建物の内外に金箔を貼った三層の楼閣は舍利殿（仏舍利を安置した建物）の「金閣」で、寺院全体は金閣寺として知られる。

昭和二十五年（1950）、放火によって焼失したが、昭和三十年（1955）に再建され、平成六年（1994）には、ユネスコの世界遺産、「古都京都の文化財」の構成資産として登録される。

「金閣」は、第一層が公家の邸宅、寝殿造の阿弥陀堂で、部戸しなむの上げ下ろしによって屋内・外を隔てる。二層は住宅風（俗説では武家造）で、引き戸によって屋外に、三層は禅宗様の仏殿風で仏舍利が置かれている。



再建された「鹿苑寺」

金閣を水面に映す鏡湖池きやうこちを中心として池泉回遊式庭園が広がり、鏡湖池には葦原島、鶴島、亀島などのほか、奇岩名石が数多く配されている。

義満は、絶大な権威のもとで政治を左右しただけでなく、この時代の文化に新生面をもたらした。

この文化の大きな特徴は、伝統的な公家文化と新興の武家文化との融合ということ、さらには禅宗の深い影響や庶民文化の洗練ということに示され、「北山文化」と呼ばれる。

軍記物語として、四十巻の『太平記』が成立したのは、1370年ごろとされ、作者は不詳だが、幕府と密接な関わりを持つ知識人が中心となって編纂したと考えられている。『難太平記』は今川氏と足利氏の歴史が主たる内容の書で、子孫宛てに書かれていて、応永九年（1402）の完成という。

禅宗寺院の鎌倉五山や京都五山漢文学の「五山文学」は、詩文、日記、論説などの分野にまで及ぶ。

連歌の形式が定められ、東福寺の僧、明兆は、元・宋の画法を習得して、水墨画を描く。田楽、猿楽から、観阿弥・世阿弥親子によって能が大成され、また、猿楽の滑稽味を洗練させた笑劇として、狂言がこれに加わる。義満や公家の二条良基よしもとらの援護が大きな力と

なつたようだ。

### 鎌倉府の成立

元弘三年（1333）、鎌倉政権が崩壊したのち、足利尊氏と弟の直義は、將軍の権力を互いに分担し、一方が京都に在れば、他方は鎌倉に在って、政権の強化を図ってきた。しかし、觀応の擾乱で両者は対立し、薩埵山体制を経て、室町幕府の鎌倉府体制が確立され、尊氏の子・義詮が京都の將軍家を継ぐと、対する基氏の子、氏満は鎌倉公方家を継承した。

### 二代目を継いだ鎌倉公方は

父・基氏が亡くなったため、嫡男の氏満は、正平二十二年／貞治六年（1367）に二代鎌倉公方となる。ただし幼かったため、京都から佐々木道誉が下向して引継ぎの事務を行う。翌年の始め、武蔵平一揆の乱が起ると、十才という幼少でありながら自ら軍勢を率いて河越に出陣した。このとき京都から引き返した関東管領の上杉憲顕も加わって乱を鎮圧した。

憲顕の死後、その息子・能憲と甥の朝房が関東管領に就任したので二人の補佐を受ける。ただし能憲亡き後は、能憲の兄弟で関東管領を継いだ上杉憲春と共に宇都宮氏綱などの諸勢力と戦い、関東に強力な支配権を形成した。

### 將軍家との対立が起こる

ただし、天授五年／康暦元年（1370）、幕府内部で抗争が起こる（康暦の政変）と、氏満はそれに呼応する。將軍義満に対して挙兵も企てたが、憲春が自刃して諫めたので断念した。

### 氏満は権力の拡大を謀り・・・

関東の親幕府派や南朝方の武家などを攻撃し、新田氏や北関東の名門の小山氏などを次々と討伐して、上杉氏や関東の有力武家たちを牽制した。

元中九年／明德三年（1392）、氏満は、將軍義満から陸奥・出羽の統治を任される。その背景には、鎌倉府の離反を阻止する意図があったとみられている。しかし、義満に対する氏満、京都の將軍家と鎌倉府との対立は解消されることは無かった。

### 三代目の鎌倉公方も・・・

応永五年（1398）、足利満兼が父・氏満の死去によって鎌倉公方を継ぐ。父の氏満と同じように満兼も將軍義満から偏諱を贈られる間柄だったが、鎌倉と京都の將軍家との間には緊張関係が続いていた。

応永六年（1399）、足利義満に対して、大内義弘が堺で挙兵（応永の乱）すると、満兼は義弘に加勢するため鎌倉を発ち、武蔵国府中まで進軍する。ただしこの時にも、関東管

領の上杉憲定に諫められ、義弘の敗死を聞いて引き返した。

## 第四代将軍は義持に・・・

義満は将軍職を譲る

応永元年（1394）、義満が出家したことはすでに述べた。この年の十二月、嫡男に将軍の職を譲る。

四代将軍となった義持は、元中三年／至徳三年（1386）に義満の側室・藤原慶子よしかを母として生まれ、そのとき九才だった。異母兄に尊満たかみちとその同母弟の宝幢ほうどう若公わかくみ（早世する）がいたが、義持は嫡子として扱われ、元服して直ちに正五位下左近衛中将に叙任される。朝廷は、義満の先例に倣って従五位下に叙す考えだったが、義満が満足しなかつたため詮議し直して、摂関家に準ずる位を与えたという。

義持の官職は急速に上位に

応永二年には従四位、翌年には正四位下、参議を経て、応永四年には従三位、権中納言、同五年、正三位、さらに同七年、従二位、応永八年に権大納言、翌九年、正二位、さらに

従一位、応永十三年（1406）、右大将を兼務した。この急な昇進には、公武に強い権力を保持していた父の強い意向があつたためで、しかも足利家の家督はまだ義満の下に在って、政治の実権は全て彼の手に握られていた。

将軍として公式の活動は・・・

応永七年（1400）一月の幕府評定始からになる。同九年から将軍として、有力な守護大名の屋敷に渡御し、寺社にも参詣した。

義満とは不仲だったのは何故？

そのころ、父・義満は、義持の異母弟となる義嗣よじつぐを偏愛していたとされ、成人した義持とは意見が合わなかつた。応永十三年（1406）に、父から譴責を受けたとき、慌てふためいた義持は、日野重光しげみつの屋敷に逃げ込んで取り成しを依頼したという。日野家は公家で、重光の姉に康子（足利義満御台所・北山院）、子に義資、宗子（足利義教御台所）、重子（足利義教側室）らがついて、重光はのちに、将軍義勝・義政兄弟の祖父になつている。

名家の資格をもつ日野家は

藤原氏北家の流れで、奈良時代から平安時代初期にかけての公卿だった。鎌倉時代に、伏見天皇に重用された十七代の当主の俊光は権大納言にまで昇任し、日野家の嫡流はその

地位を確立した。

義満は病いに倒れる

応永十五年（1408）四月、義満は病魔に襲われる。医師の治療で快方に向かったが、再び悪化したため、将軍義持は使いを送って、義満快癒の祈祷を諸寺に命じた。しかし五月には危篤となり、一度蘇生したが、遂に死去した。享年は五十一才（満四十九才）だった。法名は鹿苑院天山道義。等持院で火葬された義満の遺骨は、相国寺塔頭鹿苑院に葬られた。死後の家督相続は・・・

既述のように、公的な将軍職はすでに義持が継いでいたので、家督も相続する筈だが、私的な足利家の家督は義満が保持しており、弟の義嗣が義満の偏愛を受けていたことが問題となった。

異例の待遇を受けて義嗣は、元服以前にも関わらず家督相続の有力な候補として台頭していた。しかし義満は義嗣元服の二日後に病に倒れ、数日で危篤に陥ったため、後継者を遺言する時間は無かった。このとき、宿老（しゆくろう「宿徳老成」の人の意味で、経験を積んだ老人を指し、転じて古参の臣や家老などの称となる）の斯波義将の主張によって家督相続者は義持に決まった。

義満の死後には

朝廷から「鹿苑院太上法皇」の称号を贈られるが、斯波義将らの反対もあって将軍義持は辞退する。一方、明朝の永楽帝は、義満の死の翌年、日本に弔問使を遣わして「恭献」という諡を送った。

父と折り合いが悪い義持は・・・

朝廷・公家に対して、また、守護大名を統制する義満の政策に従わず、勘合貿易を嫌って応永十八年（1511）、明の使者を追い返したので、明との交流は停止した。

なお、義満が造成して政務の中核としていた「北山第」は、義母・日野康子の死後、鹿苑寺（金閣）を除くすべてが義持によって取り壊された。

義嗣の生い立ちを廻って

義持の異母弟となる義嗣は、応永元年（1394）に生まれた。母は、側室の春日局、幼名は鶴若丸。同年、義満は兄の義持に将軍職を譲ったので、嫡男以外は出家させるという慣例に従って義嗣は、梶井門跡に入室する。しかし、応永十五年（1408）に定めを破って義嗣は還俗した。彼は義満に愛され、北山第に住むことになる。

同年三月、義嗣は元服前の異例の任官によって従五位下に叙せられる。次いで後小松天

皇が北山第に行幸した際に天盃を下賜され、正五位下左馬頭に、さらに同月従四位下に叙せられて、左近衛中将に昇任した。同年四月、宮中で内大臣が加冠する親王並の形式で元服し、従三位参議となる。

ただし、五月に義満が死去すると、兄の義持によって、生母春日局とともに義嗣は北山第から追放された。だが、同年七月には権中納言に任官し、翌応永十六年(1409)には正三位、さらに翌々年には従二位、権大納言、応永二十一年(1414)、正二位に叙せられる。

### 義持は独自の政策を行う・・・

応永十六年(1409)、右近衛大将は兼任した義持は、如元(元の如し)のまま内大臣に転任する。

義満に任せ、後を継いだ義持をも補佐してきた宿老の斯波義将が、同十七年に亡くなると、その子の義重、孫の義淳はつづいて管領を解任され、斯波氏の力は下降した。代わって、畠山満家が後任の管領に就任すると、將軍義持は独自の幕政を行なうようになる。



足利義持肖像 (神護寺藏)

### 鎌倉府の騒動と異母弟の義嗣

一方、義嗣は昇進を続けていたが、不和になっていた相手の義兄、將軍義持を打倒することを決心し、伊勢国の北畠氏と結んで挙兵しようとした。しかし失敗すると、鎌倉府の騒動に与して争う。

### 鎌倉公方と関東管領との騒動は

応永十六年、三代鎌倉公方の満兼が三十二才で死去したため、子の持氏(幼名は幸王丸、元服して、將軍・足利義持から偏諱を受けて持氏と名乗る)が四代目の鎌倉公方となる。

応永二十三年(1416)十月、関東の鎌倉府で、義嗣の妻となる前関東管領の上杉氏憲(のちに出家して禅秀)が、鎌倉公方の足利持氏を襲撃する。「上杉禅秀の乱」は、持氏が、山内上杉家の当主の憲基を持氏が重視したことが発端とされ、対立していた犬懸家上杉家の氏憲がこれに反逆したことから始まった。

京都の幕府には直ちに注進が届いた。義持はその時参籠(寺社に籠る)中だったが、諸大名を招集して、幕府管轄地の駿河に持氏を退かせることなどを決めた。

ところが、足利義嗣が京都から出奔して、山城高雄に遁世するという事件が起こったので、十一月、義持は使者を派遣して義嗣に帰宅を促した。しかし、彼は出家を望み、これ

に感じなかった。

## 上杉家のルーツを辿る・・・

名門の上杉家は、関東管領の職を廻って二つの分流が争うことになったのであるが、本題に入る前に、上杉家の源流を探ってみよう。

京都の中級公家の家柄だったが、鎌倉時代の中頃、丹波国何鹿郡上杉荘うえすぎのしやう（現在の京都府綾部市上杉町周辺）を領して上杉氏を称した。初代上杉重房は、鎌倉幕府の征夷大將軍となった宗尊親王に従って鎌倉に下向する。後に足利氏の姻戚として勢力を伸ばした。

初代関東管領となった上杉憲顕は、上杉憲房の子で、足利尊氏・直義兄弟の母清子は、憲房の妹なので、憲顕と尊氏・直義とは従兄弟の関係となる。

山内上杉家を嫡流として、一族から犬懸、宅間、扇谷の諸家が出た（家名は、それぞれの屋敷のあった鎌倉近郊の地名に由来する）。

鎌倉府が設置されて・・・

室町幕府の出先機関として設置された鎌倉府の長官として、「鎌倉殿」（または「鎌倉御所」）

が当たる。初代は足利尊氏の子、基氏で、歴史的な用語としては、「鎌倉公方」という呼び方が定着する。

「関東管領」と言う役職は・・・

当時、幼ない基氏を補佐した執事の一人として上杉憲顕がいた。後に「関東管領」と呼ばれ、上杉氏の子孫が代々後を継いだ。

応永十六年（1409）に三代鎌倉公方の足利満兼が死去すると、満兼の子の持氏が新公方となり、このとき、関東管領の地位に在ったのは山内上杉家の憲定（初代、九代、十一代を務めた憲顕から八番目）である。

ところが、応永十八年に上杉憲定が失脚すると、山内上杉家とは対立関係にあった犬懸上杉家の氏憲うじのりが関東管領に就任する。

犬懸・山内両上杉家の葛藤

若年で鎌倉公方となった足利持氏は、犬懸上杉家の氏憲に補佐されていたが、応永二十二年（1415）四月の評定で持氏が氏憲と対立する。五月に氏憲は関東管領を更迭されて、山内上杉家の上杉憲基のりもと（憲定の子）が後任の管領となった。

犬懸上杉の氏憲は・・・

すると、翌応永二十三年、足利氏満（第二代鎌倉公方）の三男、満隆みつたかと、足利満兼（第三代鎌倉公方）の子、持仲らと諮り、地方の国人衆を加えて反乱を起こす。四代目の鎌倉公方となった、若い持氏に代わり、鎌倉府の実権を掌握しようとしたのである。

同年十月、二代目の鎌倉公方、満兼の弟となる満隆が挙兵し、氏憲と共に持氏・憲基の拘束に向かう。だが、持氏らは家臣に連れられてすでに脱出していたので（『鎌倉大草紙』）、氏憲と満隆は鎌倉を制圧下に置く。

このとき、将軍・義持は救援に乗り出して、満隆・氏憲の討伐に向かい、翌応永二十四年（1417）、氏憲軍の間隙を突いて、今川の軍が相模に侵攻する。敗れた氏憲・満隆、持仲らは鎌倉雪ノ下で自害して果て、「上杉禪秀の乱」はここに収束した。

義嗣は亡くなったが・・・

この乱は応永二十四年（1417）、幕府の支援を得た持氏によって鎮圧されたのであるが、鎮圧後の翌年、義嗣に与力したとして重臣たちに嫌疑がかかり、首謀者と目された義嗣は、翌年の一月、義持の密命を受けた側近の富樫満成に誅殺される。享年二十五才、ただし遺子（嗣子）の嗣俊つとよしは越前に下り、鞍谷公方くらたにと呼ばれるようになったといわれている。

義嗣は容姿端麗で才気があり、笙の演奏では天才的だったと伝えられる。義嗣の異例の昇進を見て、義満が義嗣を後継者と考えていると予測した武将や公家も多かった。義嗣を打ち止めた富樫満成は諸大名の反発も買うようになり、管領の畠山満家に殺害される。

鎌倉府との葛藤は・・・

将軍義持は、鎌倉公方を援護して禪秀の乱を終結させたが、持氏の戦後の処置を巡り、彼との対立に転ずる。

持氏は反乱軍に与した諸大名を許さず、討伐に専心して禪秀の縁者を追討して処刑したため、各国の諸大名は勿論、義持との間にも大きな溝が生まれる。

将軍義持は、持氏の強硬な戦後処理に怒って、応永三十年（1423）、武蔵の国人たちに対して、持氏を討伐せよとの命令を出した。持氏は追い詰められ、翌年始め、起請文を送って義持に謝罪する。両府は和睦の条件をめぐって争ったが、最終的には和解した。

義持は隠居して出家する・・・

応永三十年（1423）三月、義持は嫡子の義量よしかずに将軍の職を譲り、翌四月、等持院で出家し、法号を道詮どうせんと号した。出家の理由は、自由の身となって、かつての父・義満のような活発な政治活動をするため、あるいは、深く信仰している禅の奥義を極めるためだった、とも

いわれている。事実、義持は正室や義量らを伴いながら頻繁に寺社への参詣を繰り返した。ただし、守護大名や側近、公家らの屋敷に渡御し、義持は、有力な守護を従えて、幕政の実権を手放さなかった。

嫡男の義量は・・・

日野家（名家の資格をもつ家柄）の資康の娘で、義持の正室だった栄子を母として、応永十四年（1407）に生まれた。応永二十四年、義持の加冠で元服し、正五位下右近衛中将に任ぜられる。義持に寵愛され、参詣や参籠、遊覧の折りには、いつも義量が同行していたという。同三十年に將軍職を譲られて、五代將軍に就任したときには十七才、父・義持は三十八才だった。

しかし義量は早世する

義量は生来から病弱で、飲酒によつて、さらに健康を悪化させたといわれている。父から戒められ、近臣は義量に酒を勧めないように、と申し付けられていた。また、幕政においては、隠居していた義持や有力管領らが幕政に力をもち、実権は無いに等しかった。

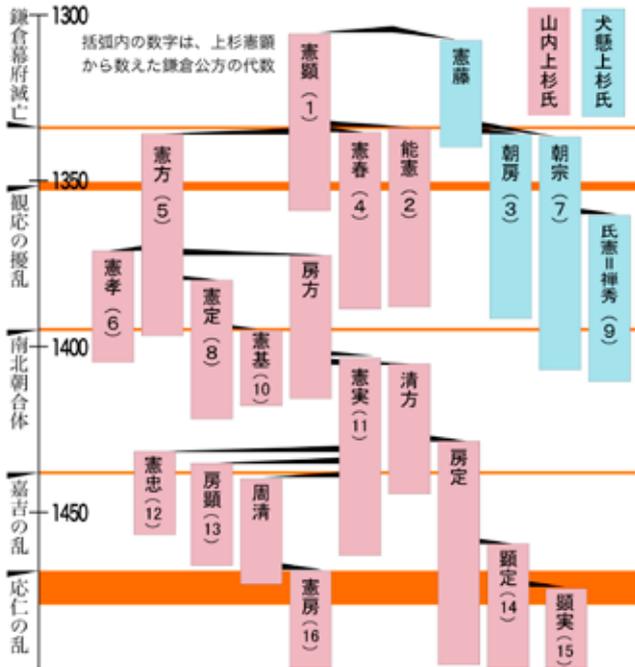
様々の治療や祈祷を受けたが、応永三十二年（1425）、父に先立って急死した。享年十九才（満十七才）。

義量にまだ子は無く、父にも他に男子がいなかったため、義持は將軍代行として、政務を執ることになる。

義持の最期は・・・

応永三十五年の一月、義持は三条八幡に例年通りに参詣し、管領の畠山満家の屋敷に渡御して正月を祝った。しかし、発熱したので、室町殿に参賀した僧侶が加持祈祷を行なった。醍醐寺の僧、大僧正の三宝院満濟（まんさい／まんぜい）は義持に謁見し、病状が重いことを知る。

### 関東管領上杉氏の系譜



年表：足利政権の確立（1） 三代将軍・義満から四代将軍の義持へ

1424	1423	1422	1421	1420	1419	1418	1417	1416	1415	1414	1413	1412	1411	1410	1409	1408	1407	1406	1405	1404	1403	1402	1401	1400	1399	1398	1397	1396	1395	西暦
応永31年	応永30年	応永29年	応永28年	応永27年	応永26年	応永25年	応永24年	応永23年	応永22年	応永21年	応永20年	応永19年	応永18年	応永17年	応永16年	応永15年	応永14年	応永13年	応永12年	応永11年	応永10年	応永9年	応永8年	応永7年	応永6年	応永5年	応永4年	応永3年	応永2年	元号
義量	足利義持																										将軍			
兼任如元	足利義量 五代征夷大将軍宣下	足利義持 四代征夷大将軍辞職のち出家		上杉憲実が二十二代目の関東管領となる		足利義量元服し義量と名乗る。右近衛中将に任官、昇殿を許される	「上杉禪秀の乱」が起こる	上杉憲基は二十代目の関東管領となる					上杉氏憲（禪秀）は十九代・関東管領となる	畠山満家が幕府の幕府管領に	足利持氏は四代目の鎌倉公方となる	三代足利義満薨去			上杉憲定は十八代目の関東管領となる	『勘合貿易』が始まる		義満は、博多の商人肥富と僧の祖阿を明に派遣	足利義満権大納言に転任	四代将軍の持氏は公式の活動を始める		足利満兼は三代目の鎌倉公方を継ぐ	金閣寺（鹿苑寺）が創建される			主な出来事



義満とその子、義持の信任が厚く、内政・外交などの幕政に深く関与して、義満からは偏諱の授与を受けていた満濟は、死期を悟った義持から呼び出される。その折りに、「いま死去しても思い残すことはない」と述べたという。

#### 後継者を重臣に任せる

義持が危険な状態となつて、管領の畠山満家をはじめ、斯波義淳、細川持元、畠山満慶らは慌てふためき、満濟の下に集合して後継者の選定を話し合った。そして満濟が義持に後継者の意向を聞いたが、「上（義持）としては定めらるべからざるなり」と述べた。

後継者を幕府の重臣に任せるといふものだったので、重臣たちは義持の意向について評議した結果、義持の弟四人の籤引きで定めることを決めた。義持は自分の死後に籤を引くようにと述べたが、重臣たちは「御没後には神前において左右無くこの御籤取りがたかるべし」として、予め神前で籤を引き、義持の死後に開封することを決める。

義持は一月十八日、危篤となつて死去する（享年四十五才）。将軍在職は二十八年に及んだ。石清水八幡宮で籤が引かれて、つぎの将軍職は同母弟の義教（よしの當時は僧職の「義圓」が継ぐこととなり、義持の遺体は等持院に移された。

#### 将軍義持は文化人だった

信心深く、多くの寺社に参詣・参籠し、特に禅文化に心酔していた。当時第一級の知識人で、武将をはじめ、京都五山の禅僧が参集して文化サロンが形成され、水墨画が発展した。自分自身も画技にも親しみ、素人離れた作品が残されている。

芸能においては、特に田楽を好み増阿弥を鼻息した。父・義満が好んだ猿楽能には冷淡だったといわれているが、猿楽能についても義満以上の鑑賞眼があつたと伝えられる。和歌や連歌の教養ももつていて、朝廷で開かれた連歌会や和歌会にはしばしば参列した。

#### 次の将軍は籤引きで……

義教は、応永元年（1394）、義満の三男（義持、義嗣の弟）として生まれ、幼名は春寅、母は側室の藤原慶子で、将軍・義持の同母弟となる。応永十年（1403）、青蓮院に入室し、同十五年には得度して門跡となり、義圓（義円）と名乗った。同じ日に異母弟の義嗣は従五位下に叙爵され、義満の後継候補からは外れる。同二十六年に天台座主となり、逸材として将来を囑望された。その後大僧正をも務めた。

後継に決まった僧職の義圓は

何度か辞退したが、重臣たちの強い要請によって応諾した。同日、青蓮院を退出して裏松（日野義資）邸に移る。公家の日野義資は藤原北家日野流の一家裏松家当主で、將軍義満の正室、日野康子の甥で、義満からは偏諱として「義」の字を与えられ、厚遇されていた。この時、後小松上皇・称光天皇は、共に日野資教（有光の父で義資の大伯父にあたる）を勅使として遣わし、義圓の相続を賀したという。

還俗して將軍に・・・

権力の空白状態を埋めるべく、幕府の首脳部は一日も早く將軍に就任することを望んだが、義圓は元服前に出家したため、無位無官だった。同年三月、還俗した義圓は義宣と名乗り、従五位下左馬頭に叙任されて、従四位に昇任する。

急遽、正室が選ばれる

僧侶であった義教は妻帯しておらず、直ちに正室を立てる必要が生じた。そこで義持の正室日野栄子が甥の日野義資（重光嫡男）と図って正室として嫁がせたのは、義資の妹で、栄子の姪に当たる宗子だった。

還俗から一ヶ月も経たない応永三十五年（1428）閏三月、正式に御台所と定められ、ついで正長元年（改元されて）六月に婚儀が執り行われた。翌年の永享元年（1429）三月には女子を出産する。

ところが、この婚姻は、義教の後見人である日野栄子によって決められたもので、夫婦仲は良くなかった。義教は次第に側室の正親町三条尹子に心を移していく。

義宣の配慮で天皇が即位する

同年、正長元年（四月改元）の七月、称光天皇が危篤に陥いると、義宣は密かに伏見宮貞成親王の皇子・彦仁王を伏見宮御所から京都に移して、後小松上皇に後継者を決めるように要請する。上皇は彦仁王を後継とする意向を伝え、義宣の配慮を受けて彦仁王は即位する（後花園天皇）。

翌年、義宣は義教と改名し、参議近衛中将に昇任されて、征夷大將軍の宣下を受ける。なお、改名の理由は「義宣」が「世忍ぶ」に通じるという俗難（世間からの非難）があったため不快だったからという。



足利義教像（妙興寺蔵）



## 延暦寺との抗争

永享五年（1433）、延暦寺山徒と争って比叡山を包囲した。翌年、和睦が成立して、義教は軍を引いたが、同七年（1435）、延暦寺の山徒は義教の施策に怒って抗議し、根本中堂に火をかけて山徒が焼身自殺した。このとき炎は京の都からも見え、世情は騒然となる。永享の乱が勃発する

既述したように、応永二十四年（1421）將軍義持は、鎌倉公方の持氏を援護して禅秀の乱を終結させたが、彼の戦後の処置を巡って幕府と鎌倉府は対立に転じた。

応永三十五年（1438）に將軍・義持が亡くなると、後継の候補者だった弟たちがすべて僧籍に在ったので、鎌倉公方の足利持氏は、自分は僧籍には入っていないことから、義持の没後、將軍に就任できると信じていた。そこで將軍の後継者となった義教を「還俗將軍」と呼んで恨んでいた。

永享十年（1438）、足利持氏は、嫡子義久が元服するとき、將軍義教を無視して勝手に名前をつけた（当時は慣例として、將軍から一字へ諱の二文字目、通字の「義」でない方）を拝領していた）ので、幕府との関係が悪化して一触即発となる。そのとき、持氏をしばしば諫めていた関東管領の上杉憲実が持氏から疎まれ、身の危険を感じて領国の上野に逃亡したので、彼は持氏の討伐を受けることになる。

## 鎌倉府は消滅する

これを好機と見た將軍義教は憲実と結び、関東の諸大名に対して持氏の包囲網を結成させる。さらに持氏討伐の勅令を得て朝敵に認定し、同十一年には関東を討伐する。持氏は敗れて恭順の姿勢を示し、一方憲実も助命を嘆願したが義教は許さず、止む無く憲実は鎌倉の永安寺で持氏らを討ち、一族は自害して鎌倉府は滅亡した。

義教は関東に勢力を広げるため、実子を新しい鎌倉公方として下向させようとしたが、これは上杉氏の反対にあつて頓挫する。

## 結城合戦が起こる

永享十二年（1440）、鎌倉府から逃亡していた持氏の遺児、安王丸・春王丸の兄弟が、持氏の残党や下総の結城氏朝・持朝父子結城氏朝に担がれて叛乱を起こす。

義教は隠居していた憲実に討伐を命じたが、関東諸將の頑強な反抗に遭う。力攻めから兵糧攻めに切り替えて、翌年の嘉吉元年（1441）四月に鎮圧し、春王・安王は京への護送途中で斬られた。結城合戦は永享の乱の延長線上の出来事だが、その規模は永享の乱よりも大きく、合戦を描いた『結城合戦絵詞』（国宝）が知られている。関東平定に成功した義教は、

## 中央集権の実現に向かう

正長二年（1439）に大和で発生した大和永享の乱（興福寺大乗院衆徒の豊田氏と興福寺一乗院衆徒の井戸氏の対立に端を発し、大和一国に広がった）では、越智氏・箸尾氏と筒井氏との争いを始め、有力な国人は、互いに一進一退の攻防を繰り返して泥沼化していた。永享十一年（1439）に至って、十年に及ぶ戦乱を一旦終結させた。

義教の時代には正長の土一揆や後南朝勢力の反乱など、室町幕府を巡る政治・社会情勢が不穏であり、義教は幕府権力の強化に一定の成果をあげた。

## 守護大名への干渉は・・・

また義教は、斯波氏、畠山氏、山名氏、京極氏、富樫氏、今川氏などの有力な守護大名に対して、その家督継承などに積極的に干渉して、將軍の支配力を強める政策を行った。

意に反した一色義貫と土岐持頼は誅殺された。当主を暗殺する強攻策に出る將軍に対して次第に不安は広がる。將軍義満、義持、義量、義教に任せ、侍所頭人を務めた有力な守護大名の赤松満祐は、永享十二年に侍所別当の職を罷免させられたため、幕府への出仕もしなくなり、義教と満祐の対立は先鋭化した。

## 將軍義教は暗殺される

嘉吉元年（1441）六月、結城合戦の祝勝会として義教を自邸に招いた赤松満祐は、嫡子の教康と弟の則繁に命じて義教を暗殺する。

結城合戦を終えた慰労という名目で、満祐の子の赤松教康は義教の「御成」を招請した。当事、將軍が家臣の館に出向き祝宴を行う御成は重要な政治儀式であった。

義教は少数の側近を伴って赤松邸に出かけたが、猿樂を觀賞していた時、突如屋敷に馬が放たれ門がいつせいに閉じられた音がした。義教は「何事であるか」と叫ぶが、傍らに座していた義教の義兄（正室・尹子の兄）・正親町三条実雅（正親町三条公治の父）は「雷鳴でありましょう」と答えた。その直後、障子が開け放たれ甲冑を着た武者たちが宴の座敷に乱入して、赤松氏随一の武士安積行秀が義教の首をはねた。

## 嘉吉の乱で赤松氏は滅亡する

強権的だった將軍が殺害されたが、指揮系統が混乱したため、洛中（京都市内）ではそれ以上の混乱は生ずることなく、満祐・教康父子は討手を差し向けられることもなく播磨に帰国する。

同年七月、ようやく討伐軍が編成され、追討されて赤松氏は滅亡した。これを嘉吉の乱

という。一方、嘉吉元年（1431）に薨去した義教は太政大臣を贈られる。

## 将軍・義教の後継は・・・

嘉吉二年（1432）、義教の嫡男・義勝が管領細川持之らに擁されて七代将軍となる。永享六年（1434）、日野重子を母として生まれ、幼名は千也茶丸（ちやちやまる）といい、政所執事伊勢貞国の屋敷で養育された。父が赤松満祐に暗殺されたため室町殿に移され、翌嘉吉二年（1432）、管領細川持之らに擁されて九才で第七代の将軍職を継ぐ。

幼年で政治能力が無いいため、持之が実権を掌握し、彼の死後は畠山持国・山名持豊や生母の日野重子らが実権を握って、嘉吉の乱を起こした満祐の討伐、嘉吉の徳政一揆などを平定する。

嘉吉三年には、義教への弔意を伝えるために来日した朝鮮通信使と会見している（『康富記』）。しかし、同年七月に死去（享年十才、満九才没）したので、在任わずか八ヶ月に過ぎなかった。死因は落馬、暗殺などの諸説があるが、赤痢による病死が有力である。墓所、遺骨等は不明だが、木像は等持院に現存している。

後任の将軍には同母弟で八才の三男、三寅、三春（のち義成（よししげ）、ついで義政）が選出された。しかし、義勝、義政と幼少の将軍が二代続いたことから、朝廷や有力守護大名は幕政に関与したので、将軍の権威は大きく揺らぎ始める。

### 八代将軍は・・・

永享八年（1436）に生まれ、管領の畠山持国などの後見を得て将軍職に就いた。文安三年（1446）、従五位上に叙せられ、同四年、正五位下に昇叙し、侍従に任官する。翌年、左馬頭に転任、同六年に元服して義成を名乗る。四月に征夷大將軍宣下、従四位下に昇叙し、参議に補任され、右近衛中将を兼任する。

宝徳二年（1450）、従三位に昇叙し、権大納言に転任、さらに従二位に昇叙、権大納言は如元（元の如し）。享徳二年（1453）、従一位に昇叙、名を義政と改める。

義政は幕府の財政難と土一揆に苦しみ、幕政を正室の日野富子や細川勝元・山名宗全らの有力守護大名に委ねて、政治を疎んだ。自らは東山文化を築くなど、もっぱら数奇の道を探求した文化人として知られる。

### 側近政治に移行しよう・・・

義政は当初、祖父の義満や父・義教の政策を復活させようと試みた。しかし、三魔と呼

ばれる乳母の今参局（御今）・烏丸資任・有馬持家（おいま、からすま、ありまと、「ま」がつく三人）や、母・重子と正室・富子の実家の日野家、有力な守護大名家が政治に介入し、将軍として、政治の主導権を握ることは困難を極めた。

### 諸大名の内紛に介入する

当時の守護大名家では家督相続の内紛が多かったが、義政はお家騒動に積極的に干渉した。

鎌倉公方の足利成氏（享徳四年 $\wedge$ 1455 $\vee$ 、古河に移って初代の古河公方となる）と関東管領上杉氏との大規模な内紛（享徳の乱）では成氏に対して追討令を発し、僧職にあった異母兄（義教の次男）の政知を還俗させ、長祿二年（1458）、幕府公認の鎌倉公方として鎌倉に派遣した。ただし、政知は鎌倉に入れず、伊豆堀越にとどまって堀越公方と称されることとなり、幕府方、山内・扇谷両上杉方、鎌倉公方方の争いは関東一円に拡大した。

### 将軍の親裁へ・・・

さらに政所執事を筆頭とする政所・奉行衆・番衆から成る将軍側近集団をつくり、これを基盤として、守護大名の勢力に対抗し、将軍の親裁権強化を図ろうとした。

次号は将軍義政の時代へ

## 「市民フォーラム」の活動

「市民フォーラム」は、地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間の「コミュニケーション」の増進に努めます。

読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

**TEL 090 (3048) 5502**

編集部原宛にどうぞ